

## ダニエル・デフォー

## 『ペストの記憶』(14)

訳 武田将明  
Takeda Masaaki

でもこの辺で、ぼくが自分で見て考えたことを一つか二つお示しできると思う。これから万が一、同様のおぞましい天災に直面しても、この記録を手にする人がいれば役に立つだろう。(1) 一般に病魔は奉公人を介して市民の家を訪れた。必需品、すなわち食料や薬品を手に入れるのに、パン屋やビールの酒蔵、商店などへ奉公人を使いに出し、表通りを行き来してもらわねばならなかった。店や市場などの場所に着くには必ず通りを抜けて行くから、そのどこかで感染者と遭わないわけにいかない。そこで命を奪う息を吸い込む破目になり、さらにそれを自分の仕える主人の家に持ちこむんだ。(2) これだけの大都市にペスト治療院が一軒しかないのは大失敗だった。バンヒル・フィールズの先に、最大でも二〇〇人か三〇〇人しか入れない治療院があったのだけれど、それじゃだめなんだ。つまり、何軒も治療院があり、さらにそのそれぞれが、一台のベッドに二人を寝かせたり、一つの部屋に二台のベッドを入れたり

しなくても千人を収容できたならば——そして全戸の主人が、とりわけ奉公人が病に冒されたらすぐに、近くのペスト治療院に入れることを義務づけられていたならば——これは本人が希望すれば、ということだけれど、実際に多くがそう望んでいたんだ——さらに貧しい人びとについても、疫病に襲われたとき調査員がおなじような対応をしていたならば——つまり、本人たちが望んだ場合に(望まなければ仕方ないけれど)入院させて、なおかつ家屋の閉鎖などしなければ——あんな何千もの人びとが次々に斃れることはなかった。ぼくはそう信じているし、当時からずっとそう考えていた。<sup>1</sup> というのも、奉公人が病に冒されても、彼らを治療院に送るか、前に話したように、病人を残して家族で避難するだけの時間があれば、全員が助かったからだ。対照的に、一人か二人発症して家を閉鎖されると、一家が全滅してしまった。重なる死体を玄関先に運び出すこともできないまま、最後は一人残らず屍となり、運び役が家に入って、すべて外に出さなければいけなくなった。どちらもよく見られた光景で、ぼくの知る範囲でも数々の例を挙げることができる。

(3) ここから、この災害が感染によって広まったのは、議論の余地なく明らかになったとぼくは思う。いま感染というのは、医者が<sup>エフェルーヴィア</sup>発散物と呼ぶなんらかの蒸気や煙が原因で、病人の息か、汗か、<sup>ただ</sup>爛れた皮膚の発する悪臭か、いやひよっとすると医者さえも想像できない別のなにかを介して広まったということだ。健康な人が病人から一定以上の距離まで近寄ると、こ

<sup>1</sup> 実際は、バンヒル・フィールズの他に、メリルボーン、ソーホー、ステップニーにもペスト治療院が建てられた。(Mullan 233)

の発散物が襲いかかり、たちまちその健康な人たちの命を司る器官まで侵入し、その血を一瞬で煮えたぎらせ、外から見る人にも判るくらい精神を掻き乱してしまう。そのときは、こうして新たに感染した人たちも、おなじやり方で他人に発散物をまき散らしているのだ。この点については、あとでいくつか例を挙げるので、それを真面目に考えてくれたら、誰でも納得しないわけにいかないだろう。疫病の流行が終息したいま、あれは神が直接手を下したもので、他にもないこの人やあの人を手にかけるよう命令を受けて実行する中間の存在などなかったと語る人がいるのを目にすると、なにか違和感を覚えずにはいられない。そんな説は無知と狂信が生んだものに決まっていると、見下してしまうんだ。これとおなじくバカげた見解を持っているのが、空気だけを介して感染が広がったと語る人たちだ。空気中には莫大な数の虫や目に見えない生物がいて、そいつが呼吸とともに体に入り、さらには空気にさらされた毛穴からも侵入し、体内ですさまじい猛毒を放つなり、毒を持った卵を生むなりして、それが血に流れこみ、身体じゅうを冒してしまうんだそうだ。これが学者ぶりながらも無知をさらけだした説だということは、みなさんの経験からも明白だろう。でもこの件は適当なときにもっと話すことにしよう。

でもいまは別のことに注意を向けなければならない。この都会の住人にとってなによりも命取りだったのは、人びと自身がだらしなく、注意を怠ったことだった。彼らはずっと前からペストが来ると注意というより警告を受けていたが、それでも食料とか、ほかに必要な物を蓄えておくような準備はなんにもしなかった。そうしておけばこの人たちは外に出ず、自分の家にもって生活できたはずだった。事実、前に述べたように、こ

れを実行した人もいて、大多数がその用心のおかげで生き延びていたのだった。さらに人びとは、ペストの襲来にちょっと慣れてしまうと、本当に感染していても流行の初期ほど他人と交流するのを遠慮しなくなったんだ。病人だと知っていても、お構いなしだった。

実を言うと、ぼくもそんな向こう見ずな連中の一人だった。ほとんどなにも蓄えがなかったから、わが家の奉公人たちは、細々したものを1ペニーとか半ペニーだけ払って買い物するたびに、外出しなければならなかった。まるで流行の始まる前と変わらずにいて、ようやくそれがバカなことだと実体験から判ったときにも、無知を脱するのがあまりに遅すぎたから、ぼくたちみんなが一ヶ月生きていけるだけの物を蓄える暇さえなかったんだ。

(東京大学准教授)